

〈新刊紹介〉

濱本真実著

『共生のイスラーム－ロシアの正教徒とムスリム－』

(山川出版社, 2011年7月, A5版, 124頁, 1260円)

千葉 美保子

かつて「諸民族の牢獄」と呼ばれたロシアには、ソ連崩壊後の現在でもさまざまな民族や宗教を信奉する人びとが暮らしている。2002年10月に実施された全露国勢調査によれば、142の民族と40の民族的集団が記載され、タタールの数は約560万人にのぼった。

著者である濱本氏は、既に『「聖なるロシア」のイスラーム』（東京大学出版会、2009年）において17世紀から18世紀前半におけるロシア・ムスリム社会を正教徒改宗政策の側面から論じているが、「NIHU（人間文化研究機構）プログラムイスラーム地域研究」の成果である「イスラームを知る」シリーズ（全12巻）の本書は、16世紀半ばから19世紀末までのロシアにおけるムスリムと正教徒の平和的な共生への道のりを明らかにすることを目的としている。

本書で中心的に扱われているロシア・ムスリムは、16世紀にロシアに併合された沿ヴォルガ・ウラル地方のムスリムである。著者によれば、この地のムスリムの歴史は、イスラームの歴史全体から見るとかなり特殊な例であるという。つまり、大規模にかつ長期間、ムスリムがキリスト教徒君主の臣民となった希少な例であり、現在にいたるまで、この地域ではムスリムとキリスト教徒が共生しているのである。そのため、沿ヴォルガ・ウラル地方のムスリムの歴史からは、ムスリムとキリスト教徒との、共生に向けた多岐にわたる関係、さらには、キリスト教徒の支配下にあるイスラームの変容などほかのムスリム地域とは異なるイスラームの姿が浮かびあがってくるという。

ところで、著者は序文にあたる「イスラーム史におけるロシア・ムスリムの特殊性」の中で、本書における「共生」を、「一つの場所で生活する」という意味で用いると断りを入れている。この限定的な意味での使用こそが、その道のりの険しさを暗に示している。

第1章「草原のイスラーム化」では、沿ヴォルガ・ウラル地方にイスラームが如何にして伝播したかを論じている。沿ヴォルガ・ウラル地方に属するキプチャク草原で最初にイスラーム化したヴォルガ・ブルガル国の時代、沿ヴォルガ・ウラル地方のムスリムはイスラーム共同体のなかに組み込まれたが、ジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）はキエフ・ルーシともどもこの地域を支配した。ジョチ・ウルスのイスラーム化は多くのテュルク系民族のイスラーム化につながり、ロシアではジョチ・ウルスのモンゴル人と、その支配下のキプチャク人やブルガル人などのテュルク系諸民族を「タタール」という名称で呼び、さまざまな側面で影響を受けていたが、1380年のクリコヴォの戦いを契機として次第にタタール人が正教の迫害者、不法なキリスト教徒の破壊者として認識されるようになる。このタタール人像が形成されていった時代は、ジョチ・ウル

スのイスラーム化と重なり、後のロシアによるジョチ・ウルス領征服の正当化に利用されたという。

第2章「『カザン史』にみる正教徒とムスリム」では、ロシア年代記『カザン史』を資料として、ロシア人がタタール人をいかに描写し、どのようにカザン征服を正当化しているかを読み解く。

著者が歴史物語を呼ぶ『カザン史』は、カザン・ハン国征服をクライマックスとして、ロシアとカザン・ハン国との関係を描いた年代記である。250本をこえる写本を残しているながらも、いまだ構成から製作年代、著者の人数も特定されていない謎多き書物である。この年代記は、大枠ではムスリムを敵として描きながらも、ムスリムに対する肯定的な評価やタタール人への同情的な記述を残しているという点で、独自性を持っている。しかし、経済的利益の面に触れることなく宗教的な動機の誇張によってカザン征服を正当化している点では、ほかの文献と同様であった。さらにイヴァン4世を敬虔なキリスト教徒として、キリスト教徒を保護する慈悲深い君主として描いている。つまり『カザン史』は、カザン征服の正当化・ツァーリの権威の確立を目的とした政治的な構築物であったと著者は評している。

第3章「ムスリムの正教改宗」では、ロシアにおけるムスリムの正教改宗についてムスリムの世界観をもとにその実態を明らかにしている。ロシア政府は周囲のムスリム地域から切り離されたヴォルガ・ウラル地方で、18世紀半ばまでムスリムに対しさまざまな正教化政策をとり、改宗したムスリムに対してはロシア人と同等の権利を与えた。また、旧カザン・ハン国領内の一般のムスリムに対しては、1552年の征服直後強制的な正教改宗を試みたが、政府に対する反乱が起ると、正教化政策よりも治安の維持を優先させた。

しかし、宗教的な寛容さは17世紀半ばを機に一変し、ピョートル1世による徹底的なムスリム貴族・軍人に対する弾圧や、ロシアのイスラームの中心地であったカシモフ皇国君主の正教受容と皇国の消滅により、ムスリム貴族・軍人はロシア本土から追放された。さらに政府は一般のムスリム住民や民間信仰者に対する正教宣教に着手し、1731年には非正教徒を改宗させるための特別な組織「新受洗者事務所」が設置された。しかし貴族・軍人に比べ正教受容によるメリットが小さかった一般のムスリム住民には宣教の効果はあまり得られなかった。しかし、沿ヴォルガ・ウラル地方においては、カザン・ハン国などと異なり、ロシア政府は正教化に失敗したムスリムを排除するのではなく、イスラームを公認し、ムスリム臣民の効率的な支配と帝国の拡大に利用する道を選んだ。著者はこのことを沿ヴォルガ・ウラル地方の特異な点として指摘している。

第4章「タタール文化復興の時代」では、他地域と比べゆるやかな政策がとられたウラル地方を中心として、ロシア政府による東方政策との関係とタタール商人による沿ヴォルガ・ウラル地方のイスラーム文化の受容の動きを見る。

1743年、本格的な東方進出の足がかりとして、ウラル山脈の南方に新たな都市オレンブルクが建設された。この辺境都市を東方諸国との貿易拠点とするために政府の政策によって移住したタタール商人は、ヴォルガ地方で強烈な正教化政策が展開されている時期に村カルガルを営み、

モスクやマラドサの建設が許可された。著者はロシア政府により形成されたロシアのイスラーム文化の拠点であったカルガルの存在を、政府の対ムスリム政策が、「良くいえば非常に柔軟性に富み、悪くいえば一貫性のないものだった」ことを如実にあらわす例としてあげている。

そのような状況下で、ロシア・ムスリムにとって、エカチェリーナ2世の融和的な政策は大きな転換期として位置づけられている。1789年に創設されたムスリム宗務協議会は、ムスリムによって運営されるロシア帝国の行政機関であり、ロシアのウマラーを統制する組織として機能した。この機関の設立は、ロシア国家がイスラームを国家の宗教の一つとして正式に認めたことを意味し、ウマラーとロシア国家の協力関係が制度として確立されたのである。また、18世紀末活発に中央アジアのイスラーム文化をこの地へ流入させることを促したタタール商人は、ロシア・ムスリム社会の近代化を進める原動力となった。彼らに続きムスリム知識人たちのあいだにも、近代化の手段としてロシア文化の受容の動きがおこり始めた。

第5章「ムスリム知識人の共生の思想」では、19世紀半ばから萌芽したムスリム知識人によるイスラーム改革運動とロシア文化受容から、キリスト教とムスリムの共生への道のりをたどる。18世紀末以降多くの留学生を中央アジアへ送り出した沿ヴォルガ・ウラル地方では、中央アジアからもたらされたイスラームが浸透していた。ウトゥズ・イマニーは、ロシア人との関係や近代化の面においては非常に保守的でありながら、神学的・法学的な問題に関しては旧態依然としたブラハのウマラーを批判し、沿ヴォルガ・ウラル地方のイスラーム改革を主張した。また、イジュティハート（クルアーン（コーラン）と預言者の言行（スンナ）に遡って判断すること）を主張したクルサヴィーの革新的な思考は、保守派的なウマラーと反目する一方で、少しずつ沿ヴォルガ・ウラル地方へ浸透していき、イスラーム改革運動の源となった。

ウマラーのあいだに広がっていたイスラーム改革運動と、ロシア文化に親しんだムスリム知識人による世俗的な改革と啓蒙への動きを取り結んだのは、ウマラーであり歴史家であったシハーブッディーン・メルジャーニーの存在であると著者は指摘する。彼によるロシア語習得の呼びかけは、ロシア式教育を受けたムスリム知識人だけでなく、進歩的なウマラーのなかからも、ロシア人との一歩進んだ共生にむけてのアプローチが生まれたことを示しているという。

タタール人としての自意識の確立を目指したメルジャーニーや「タタール語の父」カイユーム・ナスィリー、新方式学校と基軸とする「ジャディード運動」を主導した世俗的な思想を持つイスマーイール・ガスプリンスキーなどを始めとした新たなムスリム知識人層は、ロシア語を、タタール人を世界の文化や近代の技術に親しまれるための媒介と考え、ロシア・ムスリムがイスラームの信仰とそれぞれの言語や文化を維持しつつ、支配民族であるロシア人と同じ権利をもちながら、相互に理解を深めて共生することを主張したのである。19世紀末から20世紀初頭にかけては、ガスプリンスキーが唱えたような、ムスリムと正教徒の相互理解と同権にもとづく共生という理想が、真剣に追求されるようになる。しかし、1905年のロシア第一次革命以降、諸民族の自治運動の高まりと社会主義革命へのうねりのなかで、理想とは異なる方向へと進む。1917年の革命をへて、正教徒とムスリムは、無神論を掲げるソヴィエト政権のもとで宗教的な抑圧を受けながら生きていくことになった。

本書の概要は以上であるが、18世紀から19世紀にかけてのタタール人正教徒「クリャシェン」の動向や、ガスプリンスキーをはじめとしたムスリム知識人による具体的な改革活動など、より詳しい説明が欲しい箇所も見られる。しかし、興味深い3篇のコラムも収めた本書は、ロシア・ムスリムの歴史を理解する上で非常に有益な入門書であるだけでなく、ソ連崩壊後の現在、正教会が政治に相当の影響力を有するロシア連邦において、両者の真の共生をあらためて問いかけることで、ロシアにおける正教徒とムスリムの共生という問題を考えることの重要性を十分に伝えてくれている。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程)